

# 中根貞彦歌集に寄せて

野々下 晃

(会員 佐伯市暉子)

この歌集は昭和六十一年(一九八六)十月、三和銀行が発行した。著者は中根貞彦その人であるが、編集したのは渡辺忠雄氏である。日銀時代から中根翁に仕え、後に三和銀行三代目の頭取の職を継いだ。その職に当たることと十三年、引続いて人事権を握った会長職を十六年間勤め、長く銀行の実権を握り頭取のいない時に役員会を招集したり、歴代の頭取を指名する等の逸話があつて「法皇」と呼ばれ、今年(一九九九)百一歳を数え、なお名誉会長の職にある。逆算するとこの歌集編集当時、すでに八十八歳の高齢であつたにも拘らず、資料探索には遠く大分県庁や臼杵、佐伯まで歩を延ばされている。氏は、この歌集編集に当たつてその感懐かんかいを次の様に序されている。

「中根貞彦さんは、日本銀行理事から三和銀行初代頭

取に推挙され、わが国の経済界のみならず社会全般にわたり、その健全な発展のために尽力された。また、中根さんは多忙な仕事の余暇に作歌に親しむという文化人でもあつた。

昭和二年、金融恐慌の直後、中根さんは日本銀行大阪支店長に就任された。間もなく大阪に転勤を命ぜられた私は役宅へ着任のご挨拶に参上した。初対面で、しかも新米行員であることも忘れて、私は引きとめられるままに遅くまで長居をしてしまった。その時中根さんの両親やご郷里の温情溢あふれるお話に、感激したのをいまだに覚えてゐる。帰り際には自作の歌を色紙に書いて下さつた。

雲はみな錫蘭セイロンの島にあつまりて

夕立すらし磯波の見ゆ

これは大正十三年日銀のロンドン駐在を終えて帰国の途中で、セイロンを詠まれたというお話であつた。その時に同船していた斎藤茂吉先生と親しい間柄となられた中根さんが後年青山に家を新築された際、奇しくもその場所が斎藤先生の経営する青山脳病院分院の前であつたことは、お二人の間にますます親密さを加え、中根さん

中根さんは昭和三十八年、八十五歳で他界された。思えば三十七年という長い間、ご指導ご薫陶くわんとくを受けた私であるが、ご恩返しはなかなか思うに任せなかった。この度中根さんの遺された歌約二万首の中から、お忙しい佐藤佐太郎先生に選歌をとお願ひして歌集を編むことができたのは、銀行の発展と相俟つて何とか親孝行になつたのではないかと嬉しく思っている。

歌の調べを大切にされ、朗々として平明な歌境に遊ばれた作品を通じて、中根さんの人となりを偲んでいただければまことに喜ばしいことである、と。

渡辺氏は昨年六月「百年の想出」という自叙伝じじゆでんを刊行しているが、その中に「出会い」と題して「みのるを妻に迎えたことが私生活に於ける「出会い」であったとすれば、日銀時代大阪支店に勤務して時の中根貞彦支店長にめぐりあつたのが、公的生活を決定づける大きな出会いであった」と述べられている。その様な氏の翁に対する衷懷に、翁は「吾が建てし家はさかえて二十五ひとと年偏に君がちからとおもふ」と応えていて、その間柄は翁が

のではないか。

昭和三十九年（一九六四）一月二十四日、翁が逝去されてより三十五年、又昭和六十一年十月（一九八六）歌集刊行後十三年の歳月が経過した。

今や世は金融不安に揺れている。それは恰も三和銀行創設当時の世相と酷似しているのではないだろうか。

この機に歌集の中から「ふるさと」を詠まれた歌を左に列挙して、望郷の歌人中根貞彦翁を偲ぶ縁よすがとする。

### 記

佐伯市三の丸公園に立っている中根貞彦翁が詠まれた

望郷の歌碑

〔表〕 ふるさとの移ろひ

もうし布るさとの

かはらぬも宇し

はしき布る里

昭和二十七年春四月 七十四翁 中根貞彦

〔裏〕中根貞彦翁八明治十一年臼杵片切家二生レ小学校ヲ卒ヘルト

当地中根家ノ嗣トナル年少ヨリ秀才ノ誉高く東京帝国大学ヲ卒業スルヤ直ニ日本銀行ニ入り累進シ理事トナリ大阪支店長ノ時三和銀行ノ創立ニ興リ請ハレテ其初代頭取トナル永ク我  
国金融界ノ重鎮デアッタ 翁ハ温厚篤実洵ニ高潔ノ至人デア  
ル殊ニ愛郷ノ情深ク郷土ノ為ニ其勞ヲ吝マナカッタ 茲ニ翁  
ヲ慕フ者相寄リ其徳ヲ記念セニコトヲ議ル翁モト和歌ヲ嗜ム  
依ツテ歌碑ヲ建テ仰望ニ葉トスル桃李言ハサレトモ下自ラ蹊  
ヲ成ストハ此ノ謂カ

昭和二十七年四月

安藤正人 撰

菅 一郎 書

建設委員長 月本小策

この碑文の撰者安藤正人氏は、佐伯市山際土屋家の出で後に堅田宇山の安藤家を継ぎ、終戦前後請われて佐伯市助役、市長を勤めた。

昭和三十九年七月千葉県船橋市に於て於おため為半造くどま口説を發行し、又、この歌集編纂に際してはその葉しおに「二度までも台閣に登る機ありしに銀行人の誇を捨てず」という歌をよせる程の文化人でもあった。

翁は氏との交友の深さを次の様に詠んでいる。

なつかしき鶴山うやまの里にまたも来て

なつかし友と夜ふかく語る

これは翁が、菅一郎家に宿泊された時に、安藤家を詠まれた歌である。

佐伯市史は昭和四十九年（一九四七）五月一日発行された。その中の一節に佐伯人物志が編まれ、佐伯藩祖毛利高政公以下三十七名が挙げられている。この市史を編集したのは山内委員長以下十二名の委員であるが、その中に佐脇貫一君が加わっている。それらの人々の年代から察して中根貞彦翁くんだりに関する下を執筆したのは佐脇君と思うが、翁とこの碑文を書いた菅一郎画伯との間柄について次の様に説明している。

大正十四年のことであった。当時佐伯中学校で用器ようき画等を指導していた菅一郎画伯は、黒板に向かって定規をつかい方眼をえがいていた。そして何かを説明しながら方眼の中に縦横の線、斜線、円などを画いていたが、いつしか人物像になり、やがて方眼のワクを消してしまふと、そこには郷土の先輩でその頃英京ロンドンから帰朝した中根貞彦の似顔画があった。その日佐伯中学校では、日本銀行国庫局長中根貞彦講演会を開いたのであった。

註 佐伯中学校職員録によると菅一郎画伯が同校に赴

任されたのは大正十五年四月一日(一九二六)で

あつて、歌集卷末の年譜によると翁はこの夏帰郷

されて実父母の法要を営んでいる。この時に画伯

の伝つたてもあつて黒木校長が講演を要請したと思

う。

この様に翁と菅一郎画伯との交わりは古い。翁はその

間柄を次の様に詠んでいる。

【長谷の里と題して菅一郎画伯を詠む】

長谷というみやびし名よし、ここに住む画家よし、

子よし、妻さらによし、

この家にこよい宿やどるとおのづから

心も長閑のどかに寛くわろぎにけり

しづかなる菅がアトリエの寝台に

酔いしわが身をしばし横よこたふ

アトリエの隅に立てたる十五号

さやけき川に若鮎わかぢの群る

この歌碑に纏まつわる由緒ゆいじゆは略りやく以上の通りであるが、翁も

その感懐を次の様に詠まれている。

花吹雪浴みつつ歌碑に別れしは

昨日きのうと思ふに早はやや八年やとせ

次に中根家の墓所は翁在世中は養賢寺の裏山にあつ

た。極めて崇祖の念が厚かつた翁はその墓所について

養賢寺岩のきどはし山腹に

父眠ります松風ききて

みはかどの芝生のうえに散りしける

松の落葉は掃けどもまたふる

【親族山名家を詠む】

山名家おんやまのに大楠木おほくすののありし日を

記憶する人今はなからむ

【中根家菩提寺潮谷寺を詠む】

菩提寺ぼだいじの仮かりの御堂ごどうに母刀はは自みづかを

はふりまつりて何かさぶしき

註 この寺は昭和十八年全焼して、今の本堂を建てる

まで仮家を使つていた。

菩提寺の木の香ただよふ本堂に

読経よみぎやうのこえのこもりたるかも

なお中根家墓所は昭和四十年十一月、嗣子元胤氏に

よつて養賢寺裏山から潮谷寺本堂裏に移された。そのお

墓は生前親交があつた長門莫夫妻の墓や（この墓には歌が二首刻まれている）、潮谷寺前任職石田家の墓、同現住職黒木家の墓等に囲まれている。歌集の葉には莫氏が翁について詠んだ次の様な歌が載っている。

大分より彦岳越えて帰り来る

中根少年目に見ゆ白梅も見ゆ

【城山】

松はみな枯れしときけど城山は

昔ながらに樹の茂る山

なつかしきわがふるさとの城山の

ふもとの宿に二夜寝にけり

【馬場の松】

そのかみの馬場の並木の松老いて

昔ゆかしき春の残る町

【番匠川】

ふるさとの細き白魚なつかしき

屋簷の椀にしばし見入る

新しき番匠川にかかりたる

佐伯大橋うちわたりたる

【工業化する佐伯】

工業の犠牲となりてふるさとの

誇る白魚減ゆくあわれ

【歓迎会】

吾を知るふるさと人ど久にあひ

感きはまりてものも言へざり

ふるさとを訪はぬ三年に逝きしあり

いたく老いぬと思はるるあり

【葛港】

君が住む家はなつかし船待つと

しばしば来たし昔しぬびて

この窓ゆ独歩が見つつめでにけむ

葛港の渡津海の色

（大内須磨子氏の宅を詠まれた）

【池彦】

池彦の新築の部屋に集いたる

歌人達はおよそ古顔

【帰去来】

ふるさとは昔ながらにあるもよし

せと徐ろに変わるもよし

帰りなんいざふるさとにわれをまつ

山あり川あり人さへもあり

なお翁は単に金融界の重鎮であつたのみならず、憂国の士であつた。その片鱗は次の歌でもうかがわれる。

老い若きけじめもあらず故郷を

恋ふるが如く国を思はな

兵士らは塩水のみて水筒の

水はいとしき馬にこそやれ

降る如き天なる星ときほいつつ

護謨の林に飛べる螢火

### 【三和銀行祝歌】

創立の日に 昭和八年十二月九日

わが骨はいづれの山に埋むべき

浪華津に来てまつおもふかな

人はいざ我は誠の大道を

正しく強くふみていかむぞ

三和銀行経営者として就任に当って、その情熱を大阪

商人にアピールした歌

### 〔参考資料〕

一、中根貞彦歌集

二、その葉

三、佐伯市史

四、週刊ダイヤモンド（一九九八）十月十日号

五、西上浦公民館だより

六、百年の想出（渡辺忠雄自叙伝）

## ふるさとを語る会

日時 九月十一日（土）一三時三〇分

会場 佐伯図書館内 史談会図書室

テーマ 童唄・遊び唄・仕事唄ほか

これまで五回にわたりまとめて来ましたが、まだまだこれからです。歌詞をご存知の方、教えて下さい。特に女性会員の参加を望んでいます。ご連絡下さい、資料を上げます。

連絡先 TEL二二一六三三八 林